

地方都市の中心部における高齢者行動特性と幸福度に関する研究（1）

—松山市道後地域周辺を事例として—*

Study on Behavior Characteristics and Degree of Well-being of Senior Citizens in the Central Part of Regional Cities(1). *

中笠智親**・大村朋之***・羽藤英二****

By Tomochika NAKANO**・Tomoyuki OHMURA***・Eiji HATO****

1. 研究背景と目的

少子高齢化時代と言われて久しい現代において、都市計画においても、パラダイムシフトが求められている。これまでの都市計画は、都市化社会に対応するように人口増加にともない市街化の拡大などを背景に都市施設をどのように効率的かつ効果的に配置するというところに主眼が置かれてきた。

しかし、人口減少とともに、社会資本の低効率化や維持管理費の増加等の行政コスト増による財政の悪化さらには、行政サービスの低下を招いている自治体が地方都市を中心に散見されるようになってきた。

そこで、地方都市では、今後の望ましい都市像のひとつの方向として、「集約化都市構造」や「コンパクトシティ」等の概念が提示されている。その都市像の実現に向けて、都市固有の課題に対応するため、自治体では様々な施策が展開される一方で多くの研究が進められている。

そのひとつである高齢者への対応は、都市の郊外部よりむしろ市街化が先行した中心部においても、重要な課題であることは言うまでもない。

そのような社会的背景を踏まえ、望ましい都市像を推進するためにも、都市部の居住者の行動特性や多様化する価値観によるライフスタイルの包含した評価としての幸福度を把握することは重要である。さらには、その関係性を把握することは、今後の施策を実施に向けて有用であると考えられる。

そこで、本研究では、高齢化社会を念頭に置いて地方都市の中心部を対象として実施したアンケート調査結果から高齢者の行動特性を把握するとともに、幸福度及び移動満足度との関係性等について把握することを目標とする。

*キーワード：高齢者、行動特性、幸福度

**工修，東京大学大学院工学系研究科都市持続再生コース

(東京都文京区本郷7-3-1 TEL:03-5841-1672

E-mail: nakano@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

***学生非会員，東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

(E-mail: ohmura@bin.t.u-tokyou.ac.jp)

****正会員，工博，東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

(E-mail: hato@bin.t.u-tokyou.ac.jp)

2. 調査概要

(1) 調査対象地域の概要

本調査では、愛媛県松山市の中心部でもあり、高齢化が進む道後地域周辺を調査対象地域とした。調査対象地域の概要は、図-1及び表-1に示すとおりである。

調査対象地域（以下「対象地域」という。）は、松山市駅などの中心部から約500m～1km程度離れているところに位置しており、観光地で有名な道後温泉を含む地域である。

また、松山市の中心市街地活性化基本計画で定められている中心市街地地域にも含まれているとともに戸建住宅と集合住宅が混在する一般的な住宅地である。

また、対象地域全体の高齢化率は、約22%（平成17年国勢調査）と松山市全体よりも高い地域である。



図-1 調査対象地域の概略図

表-1 調査対象地域の基礎的条件

項目	データ	項目	データ
外周	約7km	人口	約14.8千人
面積	約175ha	高齢化率	約22%

(2) アンケート調査の実施概要

①アンケートの実施方式

アンケート票の配布及び回収については、回答数を確保することを念頭に、訪問配布・訪問回収方式（以下「A方式」という。）と、ポスティング配布・郵送回収方式（以下、「B方式」という。）を併用した。

②アンケートの実施時期

A方式及びB方式に対するアンケート実施は、表-2に示すとおりである。なお、A方式においては、訪問配

布時に郵送回収を要望された方や訪問回収時に不在の場合に限って郵送回収を活用した。また、B方式については、回答者には粗品を進呈することとした。

表-2 アンケートの配布・回収の概要

方式	上段：配布日・下段：回収日	回答期間
A方式	H22.6.4(土)～5(日)	1週間
	H22.6.11(土)～12(日)	
B方式	H22.6.19(土)～20(日)	2週間
	H22.7.5(月)	

③アンケートの回収数及び回収率

アンケートの回収結果は、表-3に示すとおりである。全体のアンケート回収数は、104サンプル、回収率にして10.3%であった。本調査の回収率は、一般的なアンケート調査と比較して低いと考えられる。その原因の一つとして、アンケート調査票の配布時、住民の方から個人情報の取扱いに対する質問が多くあったことから個人情報の流用に対する懸念が上げられる。また、回収したサンプルに対して、回答内容の整合性等を精査し分析データを抽出とした。

表-3 配布・回収形式によるアンケート回収結果

方式	配布数	回収数	回収率
A方式	51	32	62.8%
B方式	956	72	7.5%
合計	1,007	104	10.3%

④アンケート調査票の概要

アンケート調査票の概要（構成及び設問等）は、表-4に示すとおりである。アンケート調査票は、「a. 個人属性」、 「b. 移動（外出）特性」、 「c. パーソナルネットワーク（以下「PNW」という。）」、 「d. 幸福度・移動満足度」の4部構成としている。

表-4 アンケート調査票の概要（構成及び設問等）

構成/回答形式	設問
a. 個人属性 (選択式)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族構成 ・ 個人属性（年齢、職業、車運転の可否） ・ 居住形態、所有形態、移住の有無 ・ 世帯所得額、世帯貯蓄額
b. 移動（外出） 特性 (選択式)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外出頻度、目的、外出手段 ・ 通院の場合は、かかりつけの医者、通院頻度、通院手段
c. PNW (選択式・自由記入式)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人数、属性、関係者、続柄、コンタクト頻度等 ・ 行動日誌（1週間程度：何時、だれと、どんな目的、移動手段）
d. 幸福度・移動満足度 (選択式)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幸福度に関する事項 幸福度（10段階評価）/幸福度を判断する際の重視した基準（選択式）/重視した事項（選択式）・甲幸福度を高めるための有効な手立て（選択式） ・ 1週間の行動と気持ち（3段階評

	価) ・ 移動満足度に関する事項 移動満足度（10段階評価）/移動満足度を判断する際の重視した基準（選択式）/重視した事項（選択式）/高めるための有効な手立て（選択式）
--	--

4. 回答者の特性

図-2、図-3に、回答者の年齢構成と家族構成の集計結果を示す。回答者の年齢構成は、30代～60代ともに約20%と同程度であった。また、家族構成としては、2名が最も多く34%とであった。

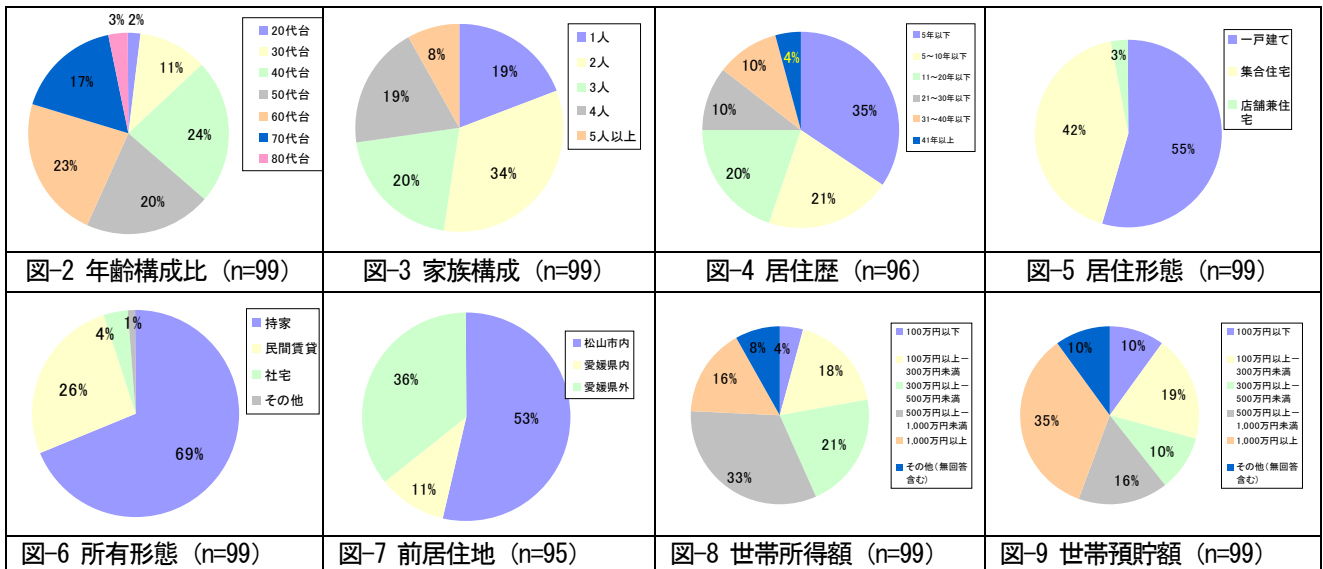
図-4、図-5の回答者の居住歴及び居住形態また、図-6に所有形態の集計結果を示す。居住歴及び居住形態においては、10年未満、一戸建てが概ね半数を占める結果となった。対象地域の市街化履歴などを踏まえるとまた、所有形態においては、持家の割合が約70%であることから、持家志向が高いことが推察できる。また、図-7に前居住地についての集計結果を示す。約半数は松山市内であるが、愛媛県外も36%と高い割合を占めている。

図-8に世帯所得額、図-9に世帯貯蓄額の集計結果を示す。世帯所得では、500万円～1,000万円が最も多く33%であった。所得は、世帯数や年代により様々であり、一律の比較は難しい。厚生労働省の国民生活基礎調査（平成16年度）の全世帯1世帯当たりの平均所得である約580万円との比較から概ね全国平均以上と推測できる。

一方、世帯貯蓄額において、1,000万円以上が最も多く35%であった。総務省の家計調査（平成21年度）によると2人以上の世帯の平均貯蓄額は1,680万円であるが、高所得者の影響をうけているため、3分2以上が平均を下回っている。このため、中央値でみると995万円であった。

家計調査結果と比較すると、全国平均的ではないかと推測できる。

回答者特性を総括すると、属性については、年齢構成に大きな偏りがなく、核家族が大部分である。居住環境においては、集合住宅や一戸建ての偏りも小さく持家が大部分を占めている。世帯所得額や貯蓄額については、共に全国平均よりも高い傾向があると推測できる。



5. 高齢者の外出特性と幸福度及び移動満足度との関係

高齢者とは65歳以上が一般的である。本研究においても65歳以上を高齢者とする。高齢者の外出特性と幸福度について傾向把握するとともに、65歳未満と比較した。回答者における65歳以上と65歳未満の割合は、図-10に示すとおり7：3であった。当該地域の高齢化率が、約22%であることを勘案すると、当該地域の人口構成とある程度の整合性があると考えられる。

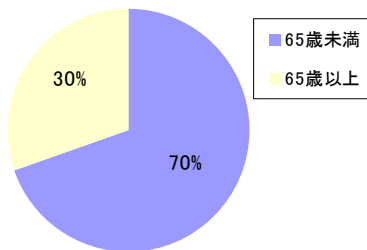


図-10 65歳以上と65歳未満との割合 (n=99)

(1) 外出頻度及び外出目的

65歳以上及び65歳未満の外出頻度及び外出目的についての比較結果を図-11及び図-12に示す。

比較結果から、65歳未満の方が外出目的として通勤、通学、業務（仕事）の割合が高いことから、毎日外出している割合が高い結果となつてと考えられる。一方で、買物の割合は同程度であった。

65歳以上及び65歳未満の外出手段の比較結果を図-13に示す。外出手段の比較結果から、65歳未満の方が、徒歩での外出の割合が高い一方で、車（自分で運転）は同程度であった。このことから、高齢者になつても車を保有し運転していることが把握できるとともに、地方都市特有の車社会であることも同時に認識できる。

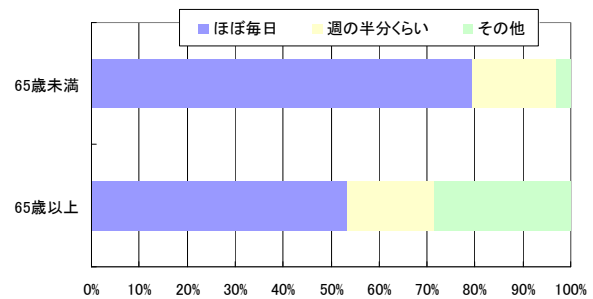


図-11 外出頻度 (n=98)

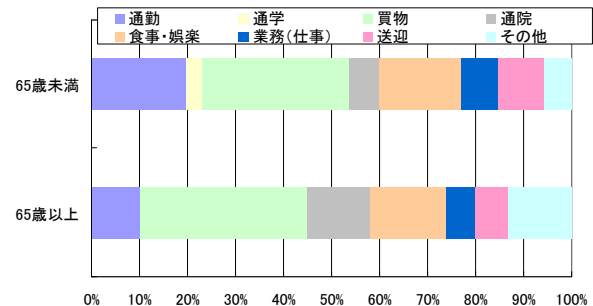


図-12 外出目的 (n=231)

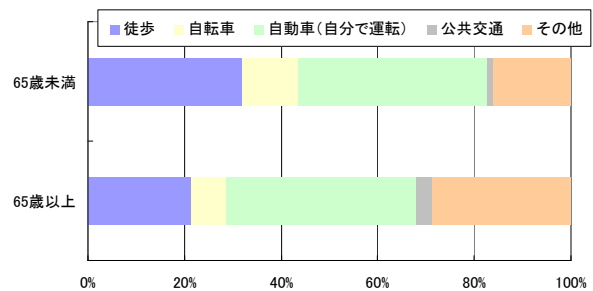


図-13 外出手段 (n=95)

(2) 外出特性と幸福度と移動満足度との関係

65歳以上と65歳未満の幸福度と移動満足度の比較結果を図-14に示す。幸福度の調査には、国で実施している調査を同様に「とても幸せ：10点」とし、「とても不幸

せ：0点」として10段階評価とした。移動満足度の調査も幸福度調査と同様に、10点満点とした。その結果、65歳未満の方が幸福度は高く、移動満足度はほぼ同程度であった。国の幸福度調査における全国平均6.5点と比較し、対象地域において65歳以上及び65歳未満ともに上回る結果であったことから幸福度が高い地域と考えられる。

65歳未満の幸福度が高い要因のひとつとして、相応の差異が顕著であった外出頻度が高いことが影響していると考えられる。

そこで、図-15に外出頻度別に65歳以上及び65歳未満の幸福度及び移動満足度との比較結果を示す。

比較結果から、幸福度は、外出頻度が高い方が、65歳以上及び65歳未満ともに高い結果となった。また、65歳以上における移動満足度は、外出頻度が高いほうが高いが、65歳未満においては、同程度であった。

このことは、高齢者にとっての外出という行為は、重要な行為であることがわかる。また、前述したように自分で運転して外出が可能である方の回答者に多いことも影響していると推察できる。

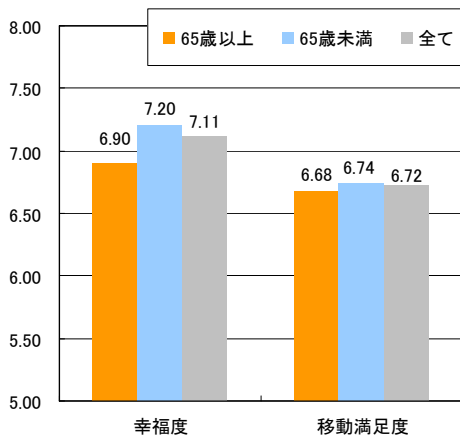


図-14 65歳以上及び65歳未満における幸福度 (n=98) と移動満足度 (n=97) の比較

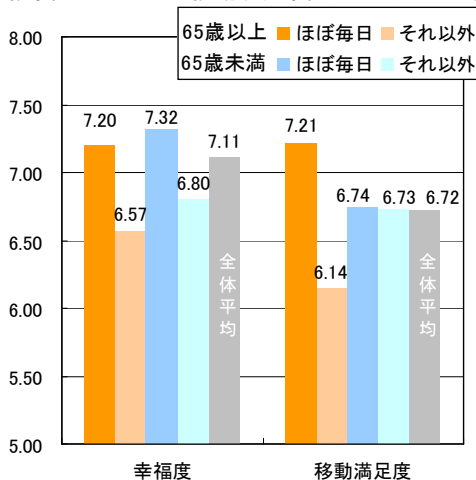


図-15 65歳以上及び65歳未満における外出頻度別の幸福度 (n=98) と移動満足度 (n=97) の比較

6. 旅行者行動に関する社会心理学的研究における、Maslowの欲求階層説を理論的枠組みとしたアプローチを用いた高齢者の外出目的と幸福度との関係性に関する考察

(1) 分析方法

前述したように外出と幸福度とは、一定レベルの関係性があることは把握した。ここでは、外出によって得られる効用レベルと幸福度との関係性を把握するために、旅行者行動に関する社会心理学的研究における、Maslowの欲求階層説を理論的枠組みとしたアプローチを用いることとした。

具体的には、佐々木¹⁾は、「旅行者行動の心理学」の中で、観光旅行の目的や動機は細かく見ていくとキリがないので、ある程度大づかみのカテゴリーで分類することが多いが、その分類は、次の5つのカテゴリーで行うことが適切であるとしている。

- ①緊張を解消したい (緊張解消)
- ②楽しいことをしたい (娯楽追求)
- ③人間関係を深めたい (関係強化)
- ④知識を豊かにしたい (知識増進)
- ⑤自分自身を成長させたい (自己拡大)

さらに、石澤²⁾は、多数の研究者が旅行者のモチベーションに関する項目を整理して最終的にしぼり込んだ65項目から旅行の動機に関する調査などの結果から因子分析して最適の因子構造として10因子構造を抽出している。

そこで、本論では、図-16に示すように観光旅行の動機づけに関する石澤のこれら10特性の5次元体系への対応づけた結果に基づき、高齢者の行動特性(行動目的等)から、5次元体系のどのレベルが満たされているか、さらに幸福度との関係性についても把握した。

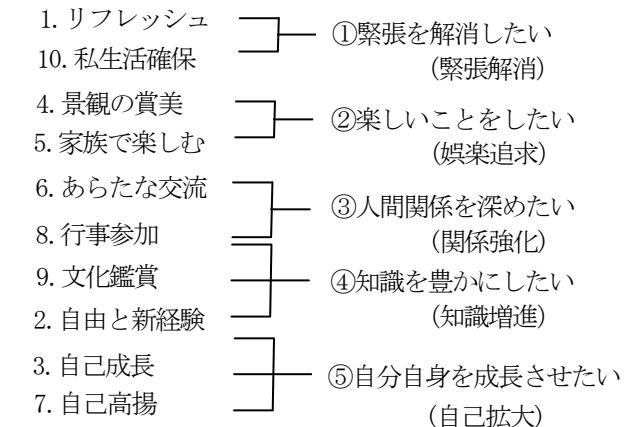


図-16 観光旅行における動機に関する石澤の10特性と5次元体系への対応づけ³⁾

(2) 対象データ

本調査では、前述したように日時、外出目的などの行

動日誌の調査を行っている。しかしながら、プライベートな内容であるため、不備や空欄があった。

そこで、高齢者の行動日誌に限定し、行動目的が具体的に把握可能であり、かつ幸福度を記載しているようなデータを抽出し、分析対象データとした。その結果、高齢者30サンプル中、13サンプルを抽出した。

なお、行動日誌は、基本的に1週間程度の行動を記載しているため、その中から最も効用が高いと思われる行動目的を選択し、10特性及び5次元体系との対応づけを行った。

(3) 考察

高齢者の行動特性（行動目的等）が、5次元体系のどのレベルを満たしているか、さらには、幸福度との関係性について分析した結果の一覧を表-4に示す。

その結果、5次元体系における「関係強化」レベル以上という結果であり、幸福度は高い値を示している。

具体的には幸福度との関係性は、「自己拡大」に対応づけた5サンプル及び「知識増進」に5サンプルの幸福度は、すべて“7点”と高い値であったこのような結果から、5次元体系のレベルと幸福度との間には一定レベルの関係性は、あることが把握できた。

表-4 高齢者の行動目的と幸福度との関係性

NO	年齢	性別	外出目的	10特性	5次元体系	幸福度
1	61	女	習い事	7	自己拡大	10
2	43	男	田植え	8	知識増進	9
3	61	男	スポーツ	7	自己拡大	10
4	66	男	友人と旅行	6	関係強化	8
5	75	男	畑仕事	2	知識増進	9
6	73	男	スポーツ	7	自己拡大	7
7	76	男	文化鑑賞	8	知識増進	10
8	75	男	レクリエーション	6	関係強化	6
9	75	男	スポーツ	7	自己拡大	9
10	67	女	文化鑑賞	8	知識増進	7
11	70	男	スポーツ	7	自己拡大	7
12	74	男	スポーツ	7	自己拡大	7
13	74	男	文化鑑賞	8	知識増進	8

7. まとめと今後の課題

本論で把握した事項を以下にとりまとめた。

- ・外出頻度は、想定どおりほぼ毎日という割合が65未満の方が多く結果となった。
- ・対象地域の65歳以上及び65歳未満ともに幸福度は、全国平均よりも高い結果となった。
- ・65歳以上より65歳未満の方が、幸福度が高い結果となった。
- ・外出頻度の幸福度との関係性については、65歳以上及び65歳未満ともに、外出頻度が高い方が、幸福度が高い結果となった。これにより、外出は、幸福度の向上の要因のひとつであると考えられる。
- ・外出目的と幸福度との関係性は、旅行者行動に関する社会心理学的研究におけるMaslowの欲求階層説を理論的枠組みとしたアプローチから、高次のレベルを満たす方が、高い幸福度を示す傾向にあった

本研究では、分析対象データ数が限定的であったため、一般化の観点からは、精度上において課題が残るという認識である。

このため、サンプル数の確保や、回答者への追加ヒアリングを実施する等を行い精度向上に努める。

その上で、高齢化社会における高齢者の幸福度向上に寄与する良好な都市空間の形成に向けて、対象地域の居住環境や空間特性などの地区特性を詳細に分析し、地区特性と幸福度との関係性についてアプローチしていくとともに、適切な分析手法についても検討していく。

謝辞

本研究を実施するにあたって、文部科学省科研費基盤A「プローブ技術を援用したデータフュージョン理論による総合的交通行動調査の高度化（代表：羽藤英二）」の協力を受けた。ここに感謝の意を表す。また、基礎データ収集にあたっては、数多くの関係者の多大なるご協力を頂いた。ここに、感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 佐々木土師二：旅行者行動の心理学, 関西大学出版 2000
- 2) 石澤章子：海外旅行価値尺度の構成—大学生の動機を探る, 関西大学社会学部卒業研究論文
- 3) 佐々木土師二：「旅行者モチベーション」及び「旅行経験」の基本的特性の分析—旅行者行動に関し定時した仮説の検証の試み, 関西大学社会学部期要 36(2), PP133-165
- 4) 佐々木土師二：観光旅行の心理学, 北大路書房, 2007